対話劇を使った「手ぶくろを買いに」の実践

尾道市立高須小学校　北川智之

1　実践の趣旨

1学期「すいせんのラッパ」では，登場人物になりきって，音読をさせた。子ども達は，強弱や抑揚をつけながら，登場人物の気持ちを想像して音読することができた。

2学期「サーカスのライオン」では，好きな場面をナレーター，じんざ，男の子，その他の人物に分かれて，劇で表現することを通して，登場人物の気持ちを読み取ることができた。「木かげにごろり」では，物語全部を劇で表現することを通して，物語全体から登場人物の関係や気持ちの変化を読み取ることができた。

これまで子ども達は，劇で表現することを通して物語を読み取ることが好きになっていた。今回は，「手ぶくろを買いに」で，対話劇を通して，登場人物の人間に対する思いの違いを読み取らせることをねらいとして，授業を行った。

今回行った対話劇とは，役ごと（今回の授業では子ぎつね，母ぎつね）に分かれて，話し合いながら文章中の会話文に言葉をつけ加え，その後，つけ加えた文章中の会話文を発表し合うことにした。また，相手の会話文を聞いて質問があるときは，質問をするようにした。台詞をつけ加えることで，より登場人物の気持ちを深く考えられるのではないかと思い，会話文に言葉をつけ加えさせた。対話劇を取り入れた理由は，2つある。1つ目は，これまでの学習から，子ども達が劇で表現することを通して，物語を読み取ることが好きになっていたことである。2つ目は，登場人物の人間に対する思いの違いが，子ぎつね，母ぎつねの2人の会話文のところによく表れているからである。

対話劇をした後，2人の人間に対する思いの違いを心情曲線に表した。心情曲線に表した理由は，子ぎつねと母ぎつねの人間に対する思いの違いが視覚的にわかりやすいのではないかと思ったからである。

第3次では，家族にメッセージを書くこととした。本文には，母ぎつねの子ぎつねに対する愛情が，行動や会話文によく表れている。母ぎつねの子ぎつねに対する愛情を子ども達が感じて，自分の家族へ日頃の感謝のメッセージを書いてほしいと思い，このようにした。

本教材は，3人称全知の立場で書かれている。本文には，登場人物の人間に対する思いが行動や会話文によく表れているので，登場人物の気持ちが読み取りやすい。子ぎつねは，手ぶくろを買いに行き，人間とのやりとりの中で，人間に対する思いが変わっていく。母ぎつねは，人間に対する不信感から，子ぎつねを待っている間，無事に帰って来られるか，とても心配している。子ぎつねの姿を見ることができない母ぎつねの気持ちを考えさせることで，子ぎつねと母ぎつねの人間に対する思いの違いをよりいっそう感じられることができる教材であると考える。

本教材を読み，子ども達に子ぎつねと母ぎつねの人間に対する思いの違いに面白さを感じることができるようにしたいと思い，授業を行った。

2　実践の概要

（1）単元名　対話劇をしよう！　　教材　「手ぶくろを買いに」（東京書籍三年下）

（2）単元の目標

○立場の違いで物語を読むことに興味を持ち，自分の考えたことを相手に伝え，考えを伝える活動を意欲的に取り組もうとしている。

○場面の移り変わりに気をつけて，登場人物の人間に対する思いの違いを読み取ることができる。

○感想や意見を伝えたり，共有したりするために，適切な言葉によって表すことができる。

（3）指導計画

次	学習内容（時数）	評価				
		関	読	言	評価規準	評価方法
一	・大まかなあらすじをとらえる。全文を読み，登場人物を整理する。（1）		○		・大まかなあらすじを書くことができる。	発言 観察 「再話シート
	・「再話シート」を利用して，場所・季節・時間の経過・天気・出来事など登場人物の関係をとらえる。（1）		○		・登場人物の関係を，自分なりの言葉で説明することができる。	発言 観察 「再話シート 発言
	・物語の構造分析カードを使って，大まかな物語の構造をとらえる。（1）		○		・物語の大まかなあらすじを構造分析カードを使って確認することができる。	観察 「再話シート
二	・母ぎつねと子ぎつねの人間に対する気持ちの違いを考えること。（1）		◎	○	・手ぶくろを買いに行くまでの，母と子の様子を対話劇から，読み取ることができる。	対話劇 発言
	・母ぎつねと子ぎつねの人間に対する気持ちの違いを考えること。（1）		◎	○	・町へ行っている時の，母と子の様子を対話劇から，読み取ることができる。	対話劇 発言
	・母ぎつねと子ぎつねの人間に対する気持ちの違いを考えること。（1）		◎	○	・森へ帰って来た時の，母と子の様子を対話劇から，読み取ることができる。	対話劇 発言
三	・新美南吉の作品を学習して考えた，「家族と自分」について家族にメッセージを書くことができる。（2）		○	◎	・読み取ったことをもとに，家族にメッセージを書くことができる。	家族へのメッセージ

（4）手立てと授業の様子

第1次の授業では，「物語全体を大まかにとらえる」ことをねらいとして授業を行った。

第1時では，子ども達に興味をもたせるために，まず，とびらの絵の分析を行った。何の絵か，場所はどこか，季節はいつか，時間は何時頃か，などについて質問した。絵全体の大まかな情報から徐々に細かい情報へと質問内容を変えるようにした。次に，教科書に載っている挿絵の並び替えを隣同士で行い，物語の内容を想像させた。最後に，「手ぶくろを買いに」の全文を読み，内容をお

おまかにとらえるようにした。

第２時では，物語全体をおおまかにとらえさせるために，図１の「再話シート」を活用した。再話シートの項目は，①登場人物（誰が出てきたのか，その登場人物の人柄），②季節，③場所，④それぞれの場所での出来事である。授業の最後に，一番心に残ったところを書き，次の授業で，一番心に残ったところランキングを発表した。

第３時では，物語の図２に示す構造分析カードを使い，大まかな物語の構造をとらえさせた。まず，１４枚のカードの並び替えを行った。次に，１４枚のカードの中から，物語の中で一番盛り上がるカードを選ばせ，理由を書かせた。「盛り上がる」とは，心がドキドキしたり，わくわくしたりするなど，読んでいて心が揺れ動くところとした。子ども達の多くが，「子ぎつね，ぼうし屋でまちがったほうの手をさしこんでしまう」のカードを選んだ。その後，前時で子ども達が書いた一番心に残ったところを集計し，発表した。子ども達の一番心に残ったところと一番盛り上がるところがぴったりと重なった。

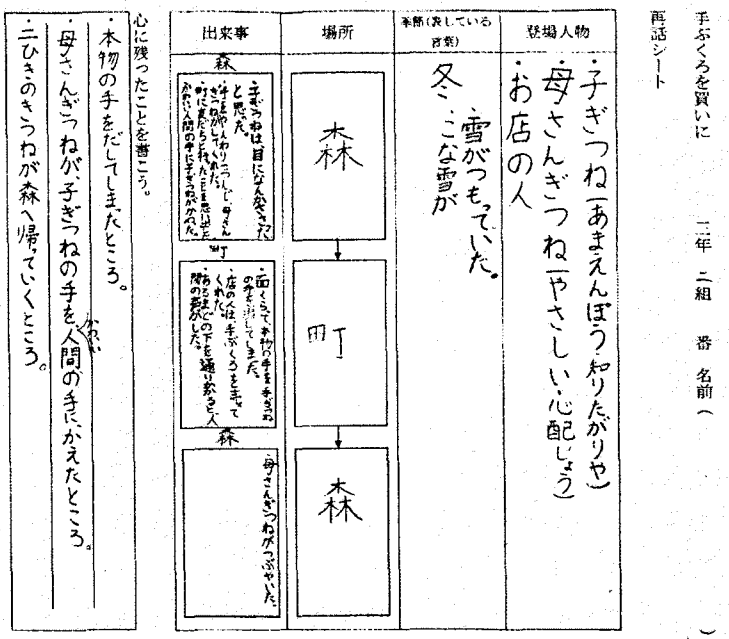

図１　再話シート

子ぎつね、雪の中で遊ぶ。	子ぎつね、ぼたん色になった両手を母ぎつねの前にさし出す。	母ぎつね、子ぎつねの手ぶくろを買ってやろうと思う。	子ぎつねと母ぎつね、町へ向かって歩いていく。	母ぎつね、町でとんだ目にあったことを思い出す。	母ぎつね、子ぎつねにひとりで手ぶくろを買いに行かせることになる。	子ぎつね、ひとりで町へ行き、ぼうし屋を探す。
子ぎつね、帰り道で人間のお母さんのやさしい声を聞く。	子ぎつね、母ぎつねの待っている方へとんでいく。	子ぎつねと母ぎつね、森の方へ帰っていく。	母ぎつね、子ぎつねのかた方の手を人間の子どもの手に変える。	母ぎつね、人間の手のほうをさし出すように子ぎつねに言う。	子ぎつね、ぼうし屋でまちがったほうの手をさしこんでしまう。	ぼうし屋、手ぶくろを子ぎつねの手に持たせてやる。

図２　構造分析カード

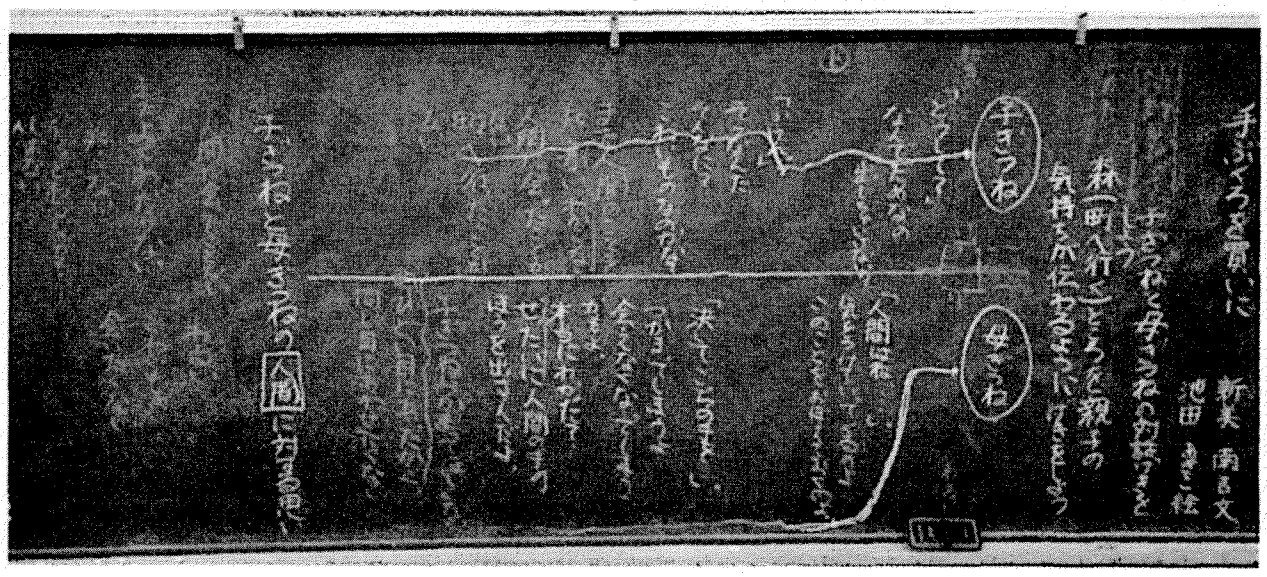

図３　第２次第１時の板書

図３のように，第１時では，「森（町へ行く）の場面の対話劇を行い，子ぎつねと母ぎつねの人間に対する思いを読み取る。」ことをねらいとした。まず，対話劇の仕方について，図４の「対話劇ルール」をもとに子ども達に説明した。説明後，子ども達は役を決め，会話文に台詞をつけ加えていった。その後で，対話劇を行わせた。子ども達は，今まで劇を行っていたので，動作で表現できない対話劇をすることに慣れない様子だった。つけ加えた台詞がうまくつながらなかった時に，どうすればよいかわからなかった様子だった。次に，つけ加えた台詞を全体で発表し，つけ加えた理由とそのときの子ぎつねと母ぎつねの気持ちを発表し合った。

対話劇ルール
①班で役ごと（子ぎつね，母ぎつね）に分かれる。
②役ごとに話し合いながら，会話文に言葉をつけ加える。
③対話劇を行う。
④聞きたいところを質問する。

図４　対話劇ルール

最後に，子ぎつねと母ぎつねの人間に対する思いを心情曲線にまとめさせ，その理由を書かせた。子ども達の発表では，次のような意見が出た。

□子ぎつね・・・そうなのかな・納得していない・よくわからない・ちょっとわるいのかもしれない

□母ぎつね・・・おそろしい・ひどい・わるい・会いたくない

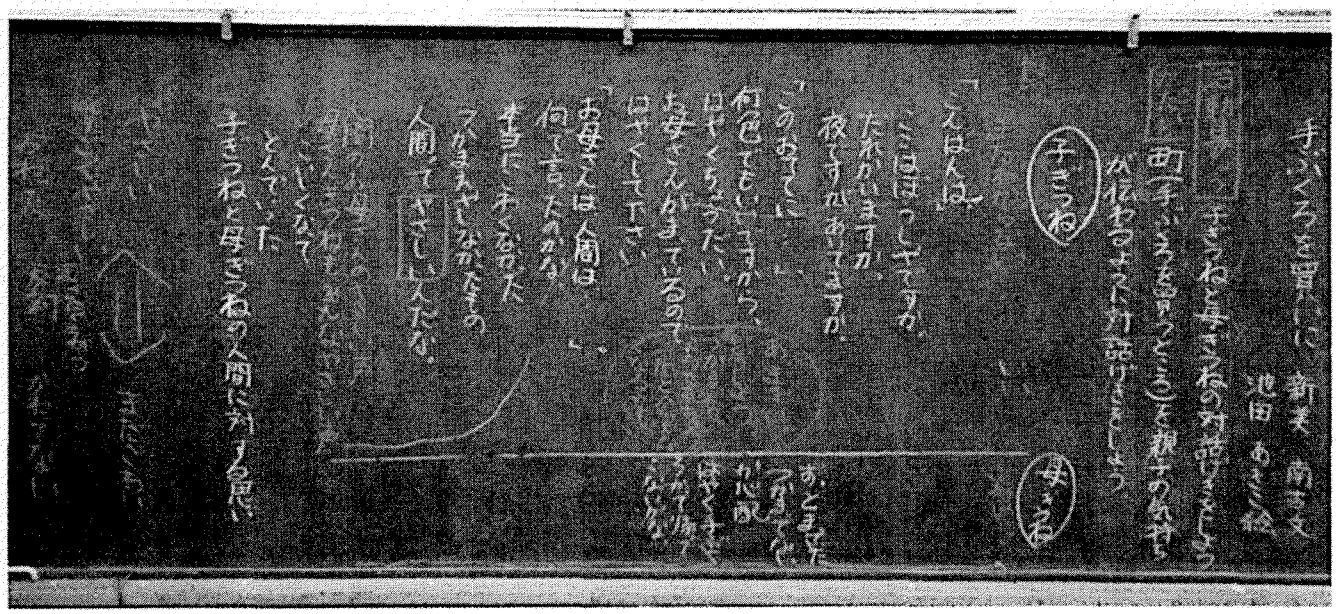

図５　第２次第２時の板書

図５のように，第２時では，「町に出た（手ぶくろを買う）場面の対話劇を行い，子ぎつねと母ぎつねの人間に対する思いを読み取る。」（主に子ぎつねについて）をねらいとした。

第１時と流れはほぼ同じであったが，この時間は，主に子ぎつねしか出てこないため，全員子ぎつねになりきって台詞をつけ加えさせた。この時間は対話劇をせず，全体で交流を行った。最後に，心情曲線にまとめさせ，その理由を書かせる際に，前時と比べて子ぎつねと母ぎつねの人間に対する気持ちがどのように変わっていったのかを考えながら書くように指導した。子ども達の発表では，次のような意見が出た。

□子ぎつね・・・やさしい（変わった）

□母ぎつね・・・まだこわい（変わっていない）

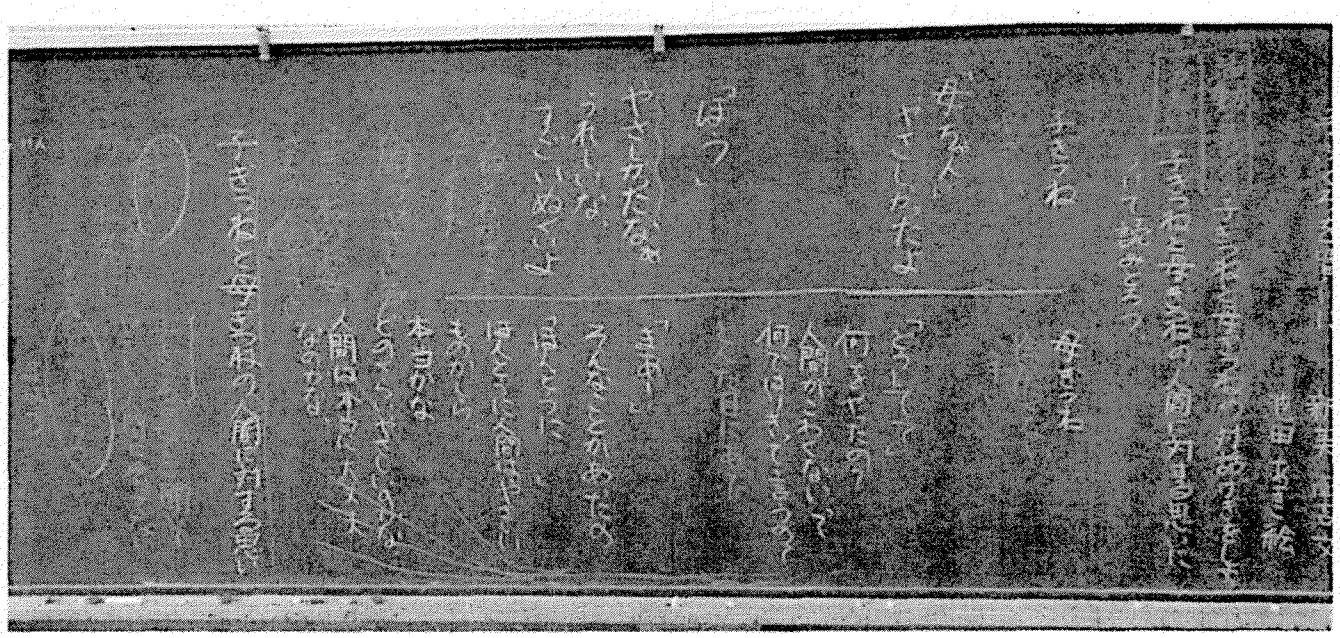

図６　第２次第３時の板書

図６のように，第３時「森へ帰る場面の対話劇を行い，子ぎつねと母ぎつねの人間に対する思いを読み取る。」をねらいとした。

第１時と流れは同じである。子ども達は，対話劇をする時に，話がうまくつながらなかった時には，質問し合う班が増えてきた。最後は，物語全体を通して，子ぎつねと母ぎつねの人間に対する気持ちがどのように変わっていったのかを考えながら書くように指導した。

□子ぎつね・・・人間はやさしい。人間のお母さんの声はやさしい。母さんぎつねの声もやさしいから。捕まえなかった。手ぶくろくれた。

□母ぎつね・・・こわいと思っていたけれど，子ぎつねの話を聞いて，どうなんだろうと思っている。まよっている。やさしい人間に会っていない。

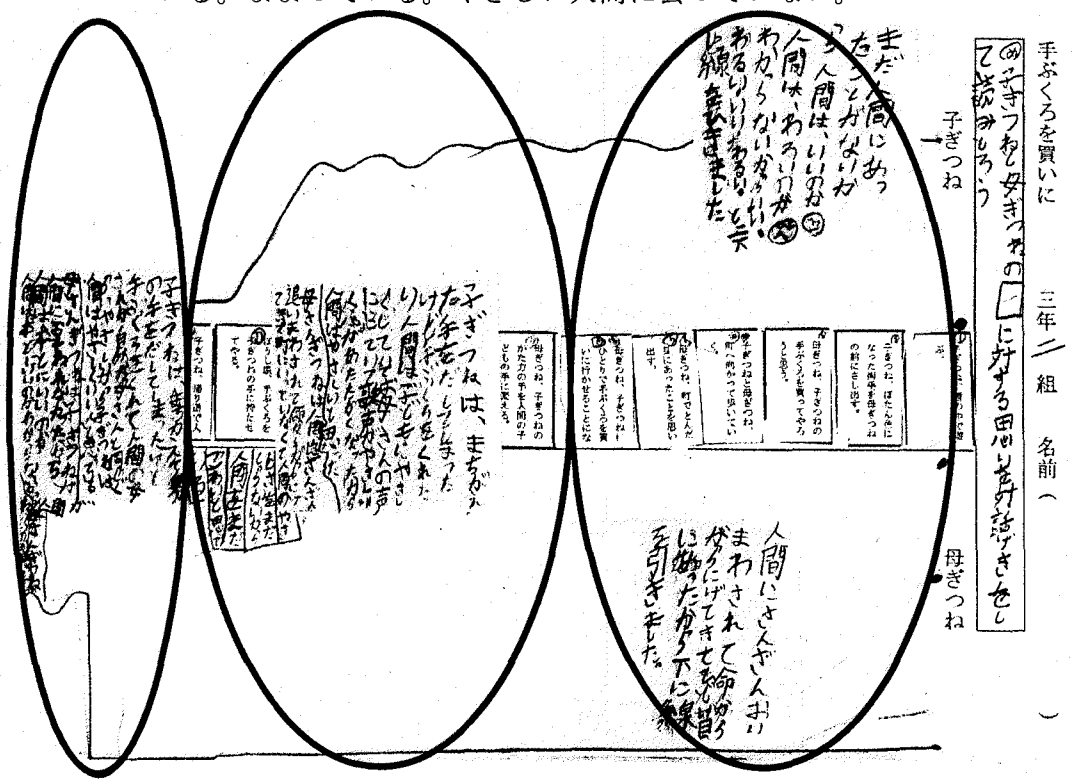

図７　学習シート

3　成果と課題

○第１次で，絵の分析や再話シート，構造分析を行い，物語全体の内容を大まかにとらえさせることで，第２次で物語全体をとらえた上で，登場人物の気持ちの変化を細かく読み取ることができた。

○多くの子ども達は，一番心に残ったところについて，子ぎつねの人間に対する思いが大きく変わるところを選んでいた。子ども達に，子ぎつねと母ぎつねの人間に対する思いの違いを考えさせていきたかったので，第２次のねらいは子どもの実態と合っていたと思う。

●対話劇を行っている時に，つけ加えた台詞がうまくつながらなかったことがあり，どうすればよいかわからなかった様子だった。すぐに質問する（話し合う）ように説明しておくべきだった。

●第３次で，家族にメッセージを書かせた時に，なかなか書けない子ども達がいた。家族にメッセージを書かせるのなら，第２次で母ぎつねの子ぎつねを思う気持ちや人間のお母さんの子どもに対する気持ちについて考えさせることをねらいとして授業を行う必要があった。第２次の授業のねらいをふまえて，第３次で子ども達に何を考えさせたいのか，そのためにどんな活動をしたらいいか考える必要がある。